

加工向けいちごの原料供給システムの構築

1. 試験のねらい

いちご王国としてのブランド力を更に高め、地域経済の活性化を図る方策として、いちご関連商品の充実と拡大が望まれる。しかし、その原料となる加工向けいちごは、取引単価が低いことや出荷量が不安定で集荷効率が上がらない等の理由により、供給が需要に応じきれていない状況にある。

解決策の一つとして、生食用いちごの生産終了後に、外部労力を活用した加工向けいちごの収穫が考えられるが、実際の実施方法等のノウハウが少ない。そこで外部労力を活用した加工向けいちご収穫の基礎データを収集するとともに、システム構築の課題を明らかにする。

2. 試験方法

(1) 外部労力を活用した加工向けいちごの収穫調査

ア. 調査対象 宇都宮大学農学部農業経済学科原田研究室ゼミ生 18名

イ. 調査方法 作業時間 120分、休憩時間 20分とし、表-1のとおり作業と休憩の時間配分が異なるA、Bのグループに調査協力の学生を振り分け、収穫作業を行い、収穫量を調査した。

(2) 収穫調査に関する関係者の意向調査

ア. 圃場提供者への聞き取り

イ. 収穫者へのアンケート調査

(3) 労賃試算

3. 試験結果及び考察

(1) 全体の収穫量は 217.5kg で、一人あたり 1時間の収穫量は約 6kg であった。A、Bグループいずれも時間の経過とともに収穫量が増える傾向にあった(表-2)。

(2) 圃場提供者は、収穫終了後に加工向けいちごを外部労力を活用して収穫しても、それで収入を得ようという気持ちはなく、親類に圃場を開放するのと同じ感覚であった。ただし、栃木県産いちごをPRしていくためにも加工部門を充実させていくのは必要だと考えていた。(表-3)。

(3) 収穫者へのアンケート調査の結果からは、労賃はなくともいちごのお土産があれば次回も参加しても良い、という人が 44%であった。しかし一方では労働に対する何らかの対価を求める学生もあった(表-4)。

(4) 労賃試算の結果から、外部労力に対する労賃の支払いは可能であると考えられた(表-5)。

(5) 今回の調査結果から加工向けいちご原料供給システムを構築するため、課題を以下のとおり整理した。

ア. 関係者の調整機能の場が必要。

イ. 収穫者の参加を促すための方策が必要。

ウ. ヘタ取り処理が出来る量は限られるため時期が集中しないように、収穫作業をずらして行うことが必要。

4. 成果の要約

加工向けいちごを生食用いちごの生産終了後に外部労力を活用して収穫した場合、労賃の支払いを行ってもシステムとして成り立つことを明らかにした。また、本システム構築の課題として、①関係者の調整機能の場、②収穫者の参加を促すための方策、③ヘタ取り処理の作業が集中しないように収穫作業をずらして行うことが、必要と整理した。

(担当者 いちご研究所 企画調査担当 米倉禎都志*) ※現生産振興課

表－1 収穫作業のグループ分け

グループ	作業と休憩の時間配分	人数
Aグループ	作業 60 分－休憩 20 分－作業 60 分	男性 4 名、女性 6 名
Bグループ	作業 40 分－休憩 10 分－作業 40 分－休憩 10 分－作業 40 分	男性 3 名、女性 5 名

表－2 グループ別の平均収穫量

グループ	前半	中盤	後半	合計	時間あたり収穫量
A	5.6	－	6.2	11.8	5.9
B	3.9	3.9	4.6	12.4	6.2

※単位は kg/人

表－3 圃場提供者のコメント

- 収穫終了の時期は人によって違う。そのあたりの調整を早めに連絡するとよい。
- 加工向けいちごの収穫でお金を儲ける気はない。近所や親類などに開放しているのと同じ感覚。
- 加工向けいちごの収穫が難しいのは、田植えの時期と重なるから。外部労力があれば可能ではないか。
- 県産いちごの知名度アップのために、加工を充実させることは重要。
- 学生と一緒に取り組むことは良いと思う。

表－4 収穫者へのアンケート結果

- 質問：いちごのお土産があれば次回も参加してもよいか？
→参加する8名(20人中)
- 質問：続けるための工夫として何が考えられるか？
→お弁当を配る(4名) 学校などの団体に参加を呼びかける(3名)
お土産以外の何かを用意する(2名) お金を払う(1名)
- その他自由意見
- 収穫されたいちごがどのように加工されるかの紹介は、親切な配慮であった。
 - 生産者の役に立ち、自分達も勉強できるこのような機会があると良い。
 - 時間ではなく、収穫する畝を決めた方が競争心がでる。

表－5 必要な労賃の試算

今回は約20aで217.5kg収穫できたことから、10aあたり収穫できる量を100kgとする。

一人あたり収穫量は、今回の平均収穫量6kg/時と前年度の研究所試験の8kg/時の中間値として、7kg/時・人とする。

100kg収穫するのに必要な労力は15時間分となる。
(100kg÷7kg/時・人≒15時間)

県の平成24年最低賃金705円で積算すると、必要な労賃は約10,600円となる。
(705円/時×15時間≒10,600円)

加工向けいちご販売代金を15,000円/100kgとした場合、労賃の支払いは可能であり、圃場提供者の収入は約4,400円となる。